

## コンテンポラリー・ダンスはどのように フランスから発生したか

### L'émergence de la danse contemporaine en France

簗 島 桂

Kei MINOSHIMA

#### Abstract

Dans les années 80 et 90, la France, ou la danse moderne n'était qu'à ses débuts, a vu la croissance rapide d'un nouveau mouvement nommé "danse contemporaine". Ce mouvement a en fait été lancé par l'état, qui voulait réaliser une réforme culturelle au sein de son pays. Les bases de cette réforme ont été établies dans les années 80, mais c'est dans les années 90, grâce au gouvernement socialiste de François Mitterrand que ce mouvement a pris un élan, pour devenir un courant culturel.

J'ai basé mes recherches sur l'étude de la naissance de la "danse contemporaine", comme problématique dans l'histoire de la danse du 20ème siècle, puis comme une réforme culturelle. Et enfin sur la question : qu'est ce que "la danse contemporaine" de nos jours.

J'ai puisé mes informations principalement dans les documents issus de "politique culturelle et réforme de la danse". Je me suis également proposé comme support, les propos relèves lors de mon entretien avec Brigitte Lefèvre, metteur en scène et directeur artistique de l'Opéra de Paris, en octobre dernier.

**keywords :** *la danse contemporaine, la politique culturelle, la danse moderne, l'Opéra national de paris, Mai 1968*

#### はじめに

1970年代から1980年代にかけてモダン・ダンスの後進国であったフランスで、急速にダンス・コンタンポレンヌという運動がおこり、その支えには、実はフランス国家の上からの文化政策があった。1970年代にその政策の基礎ができ、ミッテラン率いる社会党政権の文化政策が1980年代に実現したことから飛躍をとげ、確かな潮流となっていた。

ダンス・コンタンポレンヌの文化政策については日本人の研究者による先行研究（参照文献(40), (41), (42)）があるが、本論では現在のダンス事情を踏まえて考察をおこなった。

まず、ダンス・コンタンポレンヌの発生を、ひとつは20世紀のダンス史の中の問題として取り、またひとつは文化政策論として取り上げ、最後にダンス・コンタンポレンヌの現在の問題を提案したい。

作業手順として基本的には文献資料から、文化政策とダンスの変革を読み取っていき、また、昨年10月に、

現在パリ・オペラ座バレエの芸術監督であるブリジット・ルフェーブル（Brigitte LEFÈVRE 1947～）に直接インタビューをおこなったので、その発言も活用してまとめていく。

#### I. フランスの文化政策の始まり

フランスは17世紀から18世紀においてすでに詩、音楽、絵画などの芸術に対して文化政策を展開し、その後フランス革命によって共和国になったことを背景に、国王の財産であった美術品を市民の財産であると思ひなして、国による直接的な保護が始まった。

フランスにおけるダンスのための文化政策は、17世紀1661年にルイ王朝の財政援助によって現在のパリ・オペラ座の前身にあたるダンス学校（Académie Royal de Danse）が設立されたことに始まる。しかし、それ以降中央集権的な政策で、国はパリ・オペラ座のダンス・クラシックを中心に支えてきたため、20世紀の中頃になって世界中でモダン・ダンスが広まっているにもかかわらず、フランスではモダン・ダンスは根付かなかった。

## II. 第二次世界大戦以降のフランスの大きな文化政策

1959年シャルル・ド・ゴール (Charles de GAULLE 在任1959-1969) 大統領により、文化担当省 (Ministère des Affaires Culturelles) が国民教育省 (Ministère de l'Éducation Nationale) から独立したことによって、本格的にフランスの文化政策は発展した。このことは世界の文化政策の模範となり、教育政策の一部として取り扱われていた文化政策に対して、多くの国が見習って文化の行政部門として成立させるようになった。

初代文化大臣 (Ministre d'État Chargé des Affaires Culturelles) に任命されたのは、作家であったアンドレ・マルロー (André MALRAUX 在任1959-1969) だった。

文化の民主化と呼ばれた彼の施策は、劇場、映画館、図書館、ギャラリー、カフェなどを備えた「文化の家 (Maison de Culture)」を全国に創設することを目指し、フランスの芸術文化を国民が等しく享受できるようにするものだった。しかしその施策はパリの伝統的な芸術作品をフランス全土に普及させるといった意味の文化の民主化であって、フランスの地域に根付いた文化を活性化させるということが考慮されていなかったために、成果を出せずに終わった。

1970年代になるとポンピドゥー政権下のジャック・デュアメル (Jacques DUHAMEL 在任1971-1973) 文化大臣によって、文化は各地域における生活の質や都市環境と結びつけてとらえられるようになり、国土整備や都市計画とともに文化政策が行なわれるようになった。また文化こそが社会を形成すると主張したデュアメルのおかげで、音楽・オペラ芸術・ダンス局 (Direction de la Musique, de l'Art Lyrique et de la Danse) が行政上、成立した。

その後、ヴァレリー・ジスカール・デスタン (Valéry Giscard d'ESTAING 在任1974-1981) 政権下の文化政策では、省の人事や地位が安定せず、文化にあまり関心がもたれなかったために、文化に対する国の配慮は低く、文化省は低迷期に入った。しかし、1974年からミッシェル・ギョ (Michel GUY) が初代文化閣外大臣 (Secrétaire d'État à la Culture 在任1974-1976) に就任した2年間は、文化行政は低迷したが、社会的には文化的な盛り上がりみせる時代となった。

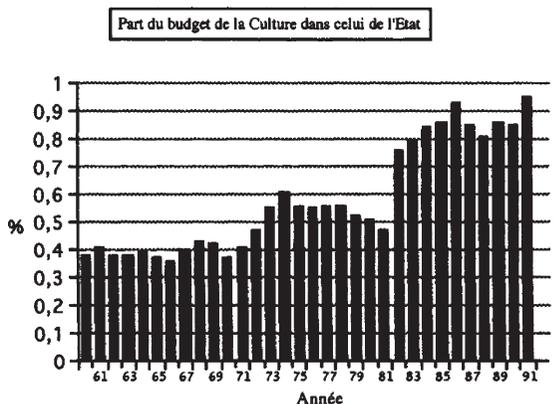
1981年以降の文化政策は、文化大臣ジャック・ラング (Jack LANG 在任1981-1986, 1988-1992) とフラ

ンソワ・ミッテラン (François MITTERRAND 在任1981-1995) 大統領を中心に強化され、フランス文化に大きな影響を与えていった。ラングは文化という概念を広義にとり、マルローとは異なる文化の民主化を進めた。つまり、それは伝統的な芸術の普及ではなく、人々のライフスタイルに根ざした多様な文化の保護と支援を目指した政策であり、国の文化予算をそれまでの約2倍にすることで実現された。

## III. 文化予算の増加

1981年以降文化予算は上記したように倍増し、1992年には国家予算の1%に限りなく近づいた。文化省は1981年以降増加した予算と、社会党政権のフランスにおいて、ジャック・ラングとフランソワ・ミッテランの支援により、文化は誰もが認める重要な分野となり、財政を握る責任者や地方の議員たちにも影響を与えるようになった。

1981年から1982年の間に増額された文化予算は1992年には104億フラン (大規模工事を合わせると120億フラン) に達した。国家予算に対する割合は10年前の0.47%から0.95%に増加した。以降、文化予算は増え続け、1993年には137億9000万フランとなり、国家予算のほぼ1%に到達した。しかしそれらの反動から90年代には政策内容に対する様々な議論が起こった。



出典：FILLOUX-VIGREUX Marianne (2001) 「LA DANSE ET L'INSTITUTION Genese et premiers pas d'une politique de la danse en France 1970-1990」Harmattan.

#### IV. ダンスにおける文化政策

1966年マルローの文化政策によって文化省の内部に音楽課が創設され、音楽総官に、自身音楽家であったマルセル・ランドウスキー (Marcel LANDOWSKI 在任1966-1974)が任命された。彼の就任により音楽、ダンスに対する政策が見直され、彼が提示した「フランスの音楽構造を組織化するための10年計画 (Le plan LANDOWSKI)」で、芸術の教育・普及・創作の援助、育成といった政策の基本ができた。それは人的財的の場に優先権を与え、地区の施設を構成して、アマチュアでもプロフェッショナルでもフランス人の音楽活動への可能性が開かれることを認めるものだった。

ランドウスキーの10年計画によって音楽とダンスを発表する場所が少しずつ広がることとなったが、しかし、この政策が実際ダンスに生かされるのは1970年代以降のことである。

ダンスに対する文化政策が音楽の政策に比べて遅れた理由として、フランスの伝統的なダンス・クラシックと新しいダンスであるダンス・コンタンポレンヌの対立が上げられる。

このことについて、パリ・オペラ座バレエの芸術監督であるブリジット・ルフェーブルは、「この時代ダンス・クラシックの人々はあらゆる権威をもって、ダンス・コンタンポレンヌは彼らになかなか認めてもらえませんでした。ヒエラルギーがはっきりしていて、その立場を確立することすらできず、ジャンルすらも認められていませんでした」と語っている。

このように芸術に対する文化政策が発足してもなお、ダンスがすぐ取り上げられなかったのは、ダンス・クラシックが自分達のダンス以外に対する教育・普及などを拒んだからだといえる。

#### V. 1960年代のフランスにおけるダンスの状況

1960年代はパリ・オペラ座を中心にクラシック・バレエが行われていた。ルフェーブルのインタビューによると1960年代のダンスの状況は以下のようである。「1960年代のダンス・クラシックは主にパリ・オペラ座で発表されていて、パリ一ヶ所に集中していました。その頃はリファールの後の時代で、低迷していた時期です。パリのスペクタクルの数も少なく、あまりバラエティに富んでいませんでした。パリは芸術の都でし

たが、それを統括する政治力というものはありませんでした。ネットワークを駆使して様々な影響の元にダンスの創作をしようとしていた人もいました。しかし、その頃ダンス・コンタンポレンヌを人に観てもらえる場所がなく、構造的にそういった場所が確立されていませんでした。」

このようにダンス・クラシックはパリ・オペラ座を中心に発表されていたが、世界的にバレエの中心がロシアに移っていた時期でもあり、パリ・オペラ座のダンス・クラシックは低迷していた。

一方で、ローラン・プティ (Roland PETIT 1924-)とモーリス・ベジャール (Maurice BÉJART 1927-)らは自分たちのカンパニーを創立し、ダンス・クラシックとは違う表現のダンスを創作し始めた。

ローラン・プティは1944年オペラ座バレエ退団後、ジャンゼリゼ・バレエ団の芸術監督・振付家・ダンサーとなり、1948年自分のカンパニー、パリ・バレエ団を結成し、1966年に活動停止をするまでの間、海外でミュージカル映画に振付を行ったり、パリでレビューやショーを開くなど様々な活動をしていた。

パリ・バレエ団ではバレエとは違った様々な試みを行ったダンスを振付けし評価を得ていた。カンパニーが活動停止したころから、各地のバレエ団のために新作バレエを振付けることが多くなり、1972年、マルセイユ・バレエ団に招かれ、1997年同バレエ団を引退した後は、フリーで世界中のバレエ団に振付けし、今なお活躍している。

ルフェーブルのインタビューによると、プティはマルセイユ・バレエ団を率いるようになり、はじめて公的支援を得て活動が可能になったという。それ以前は、芸術愛好家などのサポートによって活動をしていたそうだ。

モーリス・ベジャールは1945年、地元マルセイユでデビューして以来、ローラン・プティのバレエ団やイギリスのインターナショナル・バレエ団などに入団し、ダンサーとしての経験を積んでいた。

1953年エトワール・バレエ団を結成し、振付活動を開始した。1959年ブリュッセルの王立モネ劇場で『春の祭典』を上演し大成功を取めた。この頃ベルギーを拠点に活動していたベジャールの振付も、古典的なバレエとは違う表現をしてダンスが評価を得るようになっていった。1960年には20世紀バレエ団を結成し、多数の作品を振付けて世界各国で発表した。1970年にはブリュッセルに舞踊学校「ムードラ」を開校し、多

くのダンサーや振付家を輩出した。1987年本拠地をスイスのローザンヌに移し、ローザンヌ・モーリス・ベジャール・バレエ団を創立し、現在に至る。

このように1950年代後半からプティとベジャールは古典的なバレエとは違ったダンスを振付けて、評価を得ていた。1960年代からドイツやアメリカでおこっていたモダン・ダンスそのものは、1970年代に入ってもフランスには根付かなかつたが、ダンスにおけるモダニズムの精神は彼らのモダン・バレエの中で実現していたのではないだろうか。

## VI. もう一つのダンス事情

1960年代プティやベジャールの活動以外では、パリのシャンゼリゼ劇場を中心に様々なダンス・フェスティバル（国際ダンス・フェスティバル Festival International de la Danse, ダンス・フェスティバル Festival de Danse, バニョレ振付コンクール Ballet Pour Demain など）が開催されていた。プティやベジャールの他に、アメリカやドイツから当時世界で注目されていたモダン・ダンスやポスト・モダン・ダンスのカンパニーが招聘され、彼らはダンスを含むフランスの芸術家達に多大な影響を与えていた。

このように1950年代からオペラ座のダンス・クラシック以外のところでも新しいダンスが発表されてきてはいたのだが、ダンスに対する国からの支援はオペラ座に集中していた。そういった状況を変えるためにSNAC (Syndicat National des Auteurs et Compositeurs 著者・作曲家国立組合) が結成され、フランスのダンス組織計画の起草を提出し、ダンスに対する政策の改革を文化省に求めた。教育、表現、普及に関するこの報告書は即時の効果はなかったが、後のダンス政策の基本となった。

1960年代後半では1968年5月革命の影響を受け、身体表現への可能性に関心が寄せられるとともに身体のアイデンティティを再発見することになった。学生によって国や大学に対する反乱がおこる中、他のアートと違って表現の主体が身体そのものであり、感情を直接表現することの出来るダンスは共感を持たれ、社会に対する運動が起こったと同時に形式的なダンス・クラシックとは違う、表現形式が定まっていない自由に表現するダンスであるダンス・コンタンポレンヌが国民によりやく受け入れられるようになった。

この時代についてルフェーブルは語っている。「1968

年5月革命以降、社会の中で身体表現が重視されるようになり、身体で表現するという点に関してはダンサーが一番適切だと思われたのです。」

## VII. 1970年代のダンスの状況

1970年代は1960年代に行われていたダンスに関するアーティストの活動や5月革命以降の社会的な影響を受け、そして、芸術愛好家のミッシェル・ギイが文化大臣になり、ダンスの状況も変化し始めた。

1970年代ではパリを中心に様々なフェスティバル（フェスティバル・ドートンヌ Festival d'Automne, アヴィニオン・フェスティバル Festival d'Avignon, ナンシー国際演劇フェスティバル Festival universitaire de théâtre de Nancy など）が開催され、このような国際的なダンス・フェスティバルに新人振付家が次々と現れた。また、カロリン・カールソン (Carolyn CARLSON 1943-) やスーザン・バージ (Susan BUIRGE 1940-) のようにアメリカからダンスの伝道者が来仏し、フランスのダンス教育は広がっていった。

1977年、ジャック・ラングが主宰したナンシー国際演劇フェスティバルでは、まだ知名度が低かった海外のカンパニーを招聘し、その中にドイツ表現主義舞踊の後継者と考えられていたピナ・バウシュ (Pina BAUSCH 1940-) がいた。

ピナ・バウシュは表現主義的で演劇に近いダンスを発表し、彼女の評判は直ちに拡大し、アメリカのダンスに影響を受けていたフランスの振付も、ピナ出現の後は、演劇的なダンスによって創作されるものが増えていった。これ以降ピナはフランスのダンス・コンタンポレンヌ界に大きな影響を及ぼしている。

同じくダンス・コンタンポレンヌに影響を与えたダンスに日本の暗黒舞踏がある。1980年、舞踏家の大野一雄はナンシー国際演劇フェスティバルに、舞踏カンパニーの山海塾はナンシーとアヴィニオン演劇フェスティバルに、参加している。

## VIII. ダンスの地方分散化

1970年代初期には、フェリックス・ブラスカ (Félix BLASKA 1941-) がグルノーブルの文化の家に、ローラン・プティ・バレエ団はマルセイユに、ジョン・バビレ (Jean BABILÉE 1923-) と共にバレエ・デュ・ライン (Ballet du Rhin ライン・バレエ団) がミュル

ズに移り、ランドウスキー計画による、芸術の地方分散化の一環として、バレエ・カンパニーが地方の施設に定着し活動を始めた。

1978年には初めてのCNDC (Centre National de Danse Contemporaine ダンス・コンタンポレンヌ国立センター) がアンジェ市に設置された。

このように1970年代以降ようやくダンスの文化政策が具体的に開始した。

こうして1980年代ミッテラン政権においてますますダンス政策が発展したことに関して、ルフェーブルは「オーケストラを呼ぶよりも、ダンスを呼ぶ方が費用がかからない、ということもダンスが取り上げられた理由になります。「ダンス＝若さ」のイメージがあったのです。「若さ＝新しい」ということは左派政権のミッテランの時代に適合したのです。だからダンスへの国の関心が向けられたのです」

1970年代に確立されたダンスの政策によって、1980年代はさらにダンスの領域が拡大していった。地方に公的施設が次々と設置され、バニョレ・コンクールで受賞した振付家がそこで活動をするようになり、カンパニーとしてのダンス活動が国によって援助され、フランス全土にダンス・コンタンポレンヌが広まっていた。

主な受賞者は1974年ジジ・カシュレアヌ (Gigi CACIEULEANU 1947-)、1976年ドミニク・バグエ (Dominique BAGOUET 1951-1992)、1976、1980年ジャン・クロード・ガロット (Jean-Claude GALLOTTA 1950-)、1978年マギー・マラン (Maguy MARIN 1951-) などである。

ルフェーブルはこの時代について「振付家、ダンサーがはじめてアーティストとして認められるようになり、ダンス・アーティストとしてのステータスが確立されました。しかし政府に対して振付家の声は届いたのですが、ダンサーの声までは届きませんでした。振付家はアピールされましたが、カンパニーにまでは至りませんでした」と言っている。

振付家個人に対する援助は成されたのだが、カンパニー全体への援助は少なかったのである。

## IX. 文化政策の問題点

ルフェーブルは、1980年代は財政的な余裕があったために、こうして国家政策のおかげで現在のダンス・コンタンポレンヌの地位が確立したということ述べ

ると共に、この政策に対する否定的な点もあげている。「この時代は財政的な余裕があったためにダンス・コンタンポレンヌは発展することができましたが、問題はダンスの多様性が失われてしまったということです。この点でこの政策を残念だと思います。つまりダンスを狭く取りすぎってしまったということです。ダンス政策の悪循環のひとつとして、才能のない振付家にまで資金を与えるようなシステムをつくってしまったのです」

振付家のマンネリ、つまり国から助成を受けられるためにアーティストとして作品の内容が薄いもの、過去に上演された作品と同じことをくり返すだけのものが頻繁にみられるようになってしまったことを、彼女は危惧している。

具体的にはアンジェのCNDC (Centre national de danse contemporaine d'Angers) では創作能力を失ったディレクター、ジョエル・ブヴィエ (Joëlle BOUVIER 1959-) とレジス・オバディア (Régis OBADIA 1958-) が解雇されて、空白状態を起こしていたという事例があった。(現在では2004年よりエマニュエル・ユン (Emmanuelle HUYNH 1963-) を迎え新たに活動を開始している)

文化政策の対象として助成金が与えられても結果的に、それに値するだけの活動ができていないと判断される振付家に対しても、このように平等に国から援助されてしまうということは、この政策の弱点であるといえるだろう。

## X. 1990年代以降の文化政策とダンス

1990年以降には国家の財産として認められた歴史的建造物の修復や保護がなされるように、舞台芸術に関しても作品の保護がなされるようになった。

1995年「ダンスの記憶」というシンポジウムがパリ国際大学都市で文化省の主権によって開催され、司会をパリ・オペラ座芸術監督に就任したブリジット・ルフェーブルが担当し、舞踊作品もまた美術作品などと同様に国家の財産として保存していく必要性を述べた。

ルフェーブルは1980年代に活躍したダンス・コンタンポレンヌの若手振付家の作品をパリ・オペラ座バレエのレパートリーに組み込むことで作品が忘れ去られることを避け、その保存が出来るように試みた。

しかし、今日のダンスの傾向について質問すると「今

日のダンスといえばコンタンポレンヌとなっています。コンタンポレンヌのために力を注いできたことはよいことだったと思いますが、他のダンスを軽視してきたような気がします。ダンス・クラシックを忘れてきているのが現在の問題だと思います」と答えた。

時代の流れと共に新しい表現形式のダンスが注目されて、文化政策としてダンス・コンタンポレンヌを発展させ得たことに関しては、彼女は当然評価した。しかし支援の対象が偏ってしまったことについては、文化政策の方向性が誤っていたと述べている。現在オペラ座の芸術監督であるルフェーブルは、人々が様々なジャンルのダンスに平等に触れることができる機会を増やすべきだとして、オペラ座の演目を組み立てていると語った。

## XI. ま と め

フランスは20世紀の終わりに国からの文化政策によって、ダンス・クラシック以外のダンスが初めてリードするようになった。1970年代に基礎ができ、1980年代にフランス国内にダンスが拡大し、そして、1990年代にはダンス・コンタンポレンヌの中心となった。

現在も文化政策としてダンスの普及・育成・創作などの援助が続けられているが、しかし、その政策が始まってから30年を経て、かえって国が介入することによる歪みが顕在化し始めた。

それはダンス・クラシックが軽視されてしまったこと、ダンス・コンタンポレンヌに偏った助成がなされたこと、作家は助成されることで創作ができなくても地位を保障されていることである。

ダンスそれ自体の問題としては、ダンス・クラシックやモダン・ダンスとは違ってテクニックのないダンスでもダンスとして認められてきたために、ダンス・コンタンポレンヌの表現の幅はかえって限られるようになってきた。そのためにはもう一度ダンスの動きというものを見直す必要があり、その上で新たなダンス作品が創作されることや新たなダンス教育の必要性が出てきた。

現在の日本では、ダンスに対する国の援助は少なく、一部の企業メセナや公共団体などに支えられているものの、ダンスの普及はまだまだだが、国の介入がないことによって、自由さを保っているといえるかもしれない。

文化は確かに、国家によって保証され、育成される

といえる。しかし逆に文化こそが国家に揺さぶりをかける正義の宝刀だともいえるだろう。このバランスが骨太な文化の歴史をつくってきた。ダンスにとってこのバランスをどう保っていくかが、今後のダンスの方向性を決定づけるだろう。

### 参考文献

事典と資料集

- (1) CRAINE, Debra and MACKRELL, Judith ed. (2000) 「The Oxford Dictionary of DANCE」 Oxford University Press.
- (2) (1997) 「20世紀 ニューグローヴ世界音楽大事典10巻 ダンスIII～VII」 講談社.
- (3) ダンスマガジン編集部 (1991) 「ダンス・ハンドブック」 新書館.
- (4) 社団法人日本芸能実演家団体協議会 (2001) 「芸術文化にかかわる法制〈資料集〉 —芸術文化基本法の制定に向けて—」 芸術文化復興関係法制等 社団法人日本芸能実演家団体協議会
- (5) 財団法人地域創造 (2004) 「公立文化施設職員のための政策基礎知識」 財団法人地域創造.

著作

- (6) 尼ヶ崎彬 (2004) 「ダンス・クリティーク 舞踊の現在・舞踊の身体」 勁草書房
- (7) ジャック・アンドソン 湯川京子訳 (1993) 「バレエとモダン・ダンス—その歴史—」 音楽之友社.
- (8) モーリス・ベジャール 前田 允訳 (1999) 「モーリス・ベジャール回想録—誰の人生か?—自伝II」 構想社.
- (9) Sylvie CRÉMÉZI (1997) La Signature de la Danse Contemporaine Éditions Chiron.
- (10) FILLOUX-VIGREUX, Marianne (2001) LA DANSE ET L'INSTITUTION Genese et premiers pas d'une politique de la danse en France 1970-1990 Harmattan.
- (11) FILLOUX-VIGREUX, Marianne (2001) LA POLITIQUE DE LA DANSE L'exemple de la Région Provence-Alpes-Côte d'Azur 1970-1990 Harmattan.
- (12) 後藤和子 (2001) 「文化政策学 法・経済・マネジメント」 有斐閣.
- (13) GUERRIER, Claudine (1997) Presse Écrite et Danse Contemporaine Éditions Chiron.
- (14) GUEST, Ivore (2001) Le Ballet de L'Opéra de Paris -Trois Siècles d'Histoire et de Tradition Archevê d'imprimer en novembre.
- (15) Muriel GUIGOU (2004) 「LA NOUVELLE DANSE FRANÇAISE」 Harmattan.
- (16) 市川 雅 (1995) 「ダンスの20世紀」 新書館.
- (17) 池上 惇 (1991) 「文化経済学の可能性」 丸善.
- (18) 伊藤裕夫, 片山泰輔, 小林真理, 他「アーツ・マネージメント概要」 水曜社 (2001).

- (19) IZRINE, Agnès (2002) *La Danse dans Tous ses États* L'Arche.
- (20) 神澤和夫 (1996) 「21世紀への舞踊論」大修館書店.
- (21) 川崎賢一, 佐々木雅幸, 河島伸子 (2002) 「アーツ・マネジメント」放送大学教育振興会
- (22) 木村英雄 (1994) 「フランス生活文化史」近代文藝社.
- (23) 日下四郎 (1997) 「現代舞踊がみえてくる」沖積舎.
- (24) 小林 進 (1998) 「コミュニティ・アート・マネジメント」中央法規出版社.
- (25) イヴ・レオナール 植木 浩訳 (2001) 「文化と社会ー現代フランスの文化政策と文化経済ー」芸団協出版部.
- (26) 前田 允 (1995) 「ヌーヴェルダンス横断」新書館.
- (27) 松澤慶信編著 (1998) 「フランス・ダンスの100年」APA (芸術振興協会).
- (28) 松澤慶信 (2003) 「われわれの時代のダンスと表現主義舞踊についての覚え書き-in 身体をキャプチャーするー表現主義舞踊の系譜」慶応義塾大学アート・センター.
- (29) 野田邦弘 (2001) 「イベント創造の時代 自治体と市民によるアートマネジメント」丸善.
- (30) 乗越たかお (2003) 「コテンポラリー・ダンス」徹底ガイド 作品社.
- (31) 大木裕子 (2004) 「文化政策とアートマネジメント」.
- (32) ROBINSON, Jacqueline (1997) *Moderne Danse in France An Adventure 1920-1970* Harwood Academic Publishers.
- (33) 佐々木健一 (2004) 「美学への招待」中央公論新社.
- (34) 上野征洋 (2002) 「文化政策を学ぶ人のために」世界思想社.
- (35) 海野 弘 (1999) 「モダン・ダンスの歴史」新書館.
- (36) 渡邊守章 (2000) 「舞台芸術の現在」(財団法人)放送大学教育振興会

雑誌

- (37) 藤井慎太郎 (2001) 「文化の民主化とは何かーフランスと日本における公共政策としての 舞台芸術政策を考えるー」パブリックシアター 第12号 (財世田谷区コミュニティ振興交流財団).
- (38) 濱田耿治 (1997) 「フランスの公共劇場」パブリックシアター 第2号 (財世田谷区コミュニティ振興交流財団).
- (39) 長谷川六編 (1990) 「ダンス・コンタンポレンヌ「フランス現在の舞踊」現在の舞踊双書2 ダンスワーク41」ダンスワーク舎.
- (40) 壽田裕子「1970年代フランスにおけるスーザン・バージとカロリン・カールソンの舞踊活動ーダンス・コンタンポレンヌの発展要因を探るー」お茶の水大学人間文化研究年報 第25号
- (41) 壽田裕子「1970年代フランスにおけるダンス政策」お茶の水大学人間文化研究年報 第27号
- (42) 安田 静「1980年代フランスの文化政策ーダンスの事例を中心とする日仏の文化観の比較・考察ー」日本大学経済学部研究紀要 第37号

HP

- (43) [www.cnd.fr](http://www.cnd.fr)
- (44) [www.culture.fr](http://www.culture.fr)
- (45) [www.culture.gouv.fr](http://www.culture.gouv.fr)

(平成17年9月21日受付)  
(平成17年12月15日受理)

付録1 フランスおよびその文化政策に関わる推移

西暦	年	主な出来事	年	文化大臣・ダンス制作指導者	年	大統領
1950年代	1946-58	第四共和政			47-54	オリオール(Vincent AURIOL)
	51	ESCS(欧州石炭鉄鋼共同体)条約調印				
	51-63	TNP(国立民衆劇場)改革				
	52	EDC(ヨーロッパ防衛共同体)条約調印			54-59	コティ(René COTY)
	54-62	アルジェリア民族解放闘争				
	54	ロンドン協定・パリ協定に調印				
	56	WEU(西ヨーロッパ連合)結成				
	56	モロッコ・チュニジア独立(仏連合内)				
	58	スエズ出兵・撤兵				
	58	アルジェリアで駐留仏軍反乱				
	59	1958年憲法制定 第五共和政発足				
	59	国立映画センター, 文化問題省に移管	59-69	文化問題大臣 アンドレ・マルロー(André MALRAUX)	59-66	ドゴール(Charles de GAULLE)
1960年代	60	EFTA(欧州自由貿易連合)正式に発足				
		核開発(サハラで原爆実験)				
	61	文化の家設立開始				
	62	エヴィアン条約(仏・アルジェリア和平協定)				
	63	仏・西独協力条約調印				
	66	NATO(北大西洋条約機構)軍事機構脱退	66-74	文化問題省音楽総官 マルセル・ランドウスキー(Marcel LANDOWSKI)	66-69	ドゴール(Charles de GAULLE)
	68	五月革命 国民議会選挙 新教育法制定	69-70	文化問題大臣 エドモン・ミシュレ(Edmond MICHELET)	69-74	ボンピドゥー(Georges POMPIDOU)
1970年代			70	文化問題大臣 アンドレ・ベタンクール(André BETTENCOURT)		
			70-80	ダンス担当官 レオヌ・メール		
	71	FIC(文化支援基金)創設	71-73	文化問題大臣 ジャック・デュアメル(Jacques DUHAMEL)		
	72-76	国立劇場改革				
	73	拡大EC(ヨーロッパ共同体)発足	73-74	文化問題大臣 モーリス・ドリュオン(Maurice DRUON)		
	74	ORTF(フランス国営放送局)改革	74	文化問題大臣 アラン・ペイルフィット(Alain PEYREFITTE)	74-81	ジスカール・デスタン(Valéry Giscard d'ESTAING)
		文化協約創設, 国立高等演劇学院改革	74-76	文化問題大臣 ミッシェル・ギー(Michel GUY)		
			74-79	文化問題省音楽総官 ジョン・マウ		
	75	全欧安保協力会議(ヘルシンキ宣言) 第一回サミット	76-77	文化大臣 フランソワーズ・ジルー(Françoise GIROUG)		

西暦	年	主な出来事	年	文化大臣・ダンス制作指導者	年	大統領
1970年代			76	ダンス課課長 イゴール・エス ネール		
	77	DRAC(地方圏文化問題局)設立	77-78	文化・環境大臣 ミッシェル・ ドナルド(Michel d'OR- NANO)		
	78	ポンピドゥー・センター開場 美術館・博物館法, 興行収益 前資金制度の改革	78	ダンス課課長 イゴール・エス ネール		
	79	書籍価格の自由化, アドミカ ル設立	78-81	文化コミュニケーション大臣 ジャン＝フィリップ・ルカ (Jean-Philippe LECAT)		
			79-80	ダンス課課長 イゴール・エス ネール		
1980年代	80	文化財年	81	文化コミュニケーション大臣 ミッシェル・ドナルド(Michel d'ORNANO)		
	81	社会党政権樹立	81-86	文化大臣 ジャック・ラング (Jack LANG)	81-88	ミッテラン(François MITTERRAND)
	86	保守連合総選挙勝利	86-88	文化・コミュニケーション大臣 フランソワ・レオタル (François LÉOTARD)		
			88	文化・コミュニケーション大臣 ジャック・ラング(Jack LANG)		
			88	コミュニケーション大臣 カ トリーヌ・テスカ(Catherine TASCA)		
			88-91	文化・コミュニケーション・グ ラントラヴォー・革命二百年祭 大臣 ジャック・ラング(Jack LANG)	88-95	ミッテラン(François MITTERRAND)
	89	フランス革命二百年祭 ルーヴル美術館ピラミッド完 成 新凱旋門(アルシュ)完成				
1990年代	90	バスティーユ・オペラ座開場	91-92	文化・コミュニケーション大臣 ジャック・ラング(Jack LANG)		
	92	ヨーロッパ統一市場発足	92-92	文化・国民教育大臣 ジャッ ク・ラング(Jack LANG)		
	93	EU(ヨーロッパ連合)発足	93-95	文化・フランス語圏大臣 ジャック・トゥーボン(Jac- ques TOUBON)		
			95	文化大臣 フィリップ・ドウス ト・ブラジ(Philippe Douste BLAZY)	95-	シラク(Jacques René CHIR- AC)
	99	EU単一通貨ユーロの流通開 始	97	文化・コミュニケーション大臣 カトリーヌ・トゥーロトマン (Catherine TRAUTMANN)		

付録2 20世紀後半のダンスに関する動向年表

西暦	年	ダンスに関する動向
1950年代	59	文化大臣マルローの下で「文化の家」の建設を開始 NDT（ネザーランド・ダンス・シアター）創設
1960年代	60	モーリス・ベジャール、20世紀バレエ団創設
	61	ルドルフ・ヌレエフ、ソ連から西側に亡命
	62	ミッシェル・デスコンベイ、パリ・オペラ座の芸術監督に就任
	63	パリ国際ダンス・フェスティバル開催
	64	マース・カニングハム、ポール・テイラー、フランスで公演
	65	ローラン・ブティ、オペラ座に『ノートルダム・ド・パリ』振付
	66	デスコンベイがダンスに振付研究活動の機会を与えるために、オペラ座の中にバレエ・スタジオを創設
	67	ベジャール、アヴィニオン演劇祭で『現代のためのミサ』を発表
	68	パリ市立劇場開場。ダンスの地方分散化政策が始まり、アミアン市の文化の家に Ballet Théâtre Contemporain が設立 アルヴィン・ニコライ・ダンスシアター、パリで初演
	69	バニョレ振付コンクール「Ballet pour demain」開始 リヨン・オペラ座バレエ結成
1970年代	70	モーリス・ベジャール、バレエ学校「ムードラ」設立
	71	ミッシェル・ギーの下でフェスティバル・ドートンヌ開催 アヴィニオン演劇祭創始者ジャン・ヴィラール死去
	72	アヴィニオン演劇祭ディレクターにポール・ピュオーが就任 同演劇祭芸術顧問にアンドレ＝フィリップ・エルザンが就任 ローラン・ブティ、マルセイユ・バレエ芸術監督就任
		バレエ・フェリックス・プラスカがグルノーブル市の文化の家の専属カンパニーになる
	73	ロルフ・リーバーマン、パリ・オペラ座総裁に就任 フォーサイス、シュツットガルト・バレエ入団 カニングハム、パリ・オペラ座バレエ委嘱作品『Un jour ou deux』を制作 ピナ・バウシュ、ヴッパータール舞踊団芸術監督就任
	74	テアトル・デュ・シランスがロシュエル市の文化の家の専属カンパニーになる バニョレ振付コンクールが国家公認となる
	75	パリ・オペラ座舞台研究グループ創設 カロリン・カールソン、初めてパリ市立劇場に登場
	76	バニョレ振付コンクールでドミニク・バグエ、ジャン＝クロード・ガロッタらが入賞 アヴィニオン演劇祭でロバート・ウィルソン『Einstein on the Beach』を発表
	77	エクス・アン・プロヴァンスでダンス・フェスティバル「Danse à Aix」開催
	78	アンジェ現代振付センター（フランス初の国立振付学校）設立 バニョレ振付コンクールにてクリスティーヌ・ジェラルム入賞 ナンシー・バレエ団結成（2000年ロレーヌ・バレエに改名） イリ・キリアン、ネザーランド・ダンス・シアターの芸術監督に就任
	79	ピナ・バウシュ、パリ市立劇場で『青ひげ』と『七つの大罪』を発表
1980年代	80	ロルフ・リーバーマン、パリ・オペラ座総裁退任 モンベリエ市に振付センター創設（芸術監督：ドミニク・バグエ） リヨン市にダンス専門劇場「ダンスの家」設立 シャトーヴァロンでダンス・フェスティバル開催
	81	クレティユにマギー・マラン、カンヌにカンタン・ルイイエ、グルノーブルにガロッタ、各々のカンパニーが文化の家の専属になる ラ・ラ・ラ・ヒューマン・ステップス結成 ヴァル・ド・マルヌ国際ダンス・ビエンナーレ開催 パリ・オペラ座振付研究グループ創設（ジャック・ガルニエ） モンベリエ国際ダンス・フェスティバル開催

西暦	年	ダンスに関する動向
	83	テアトル・ジョゼフ・ルシロがトゥールーズ市文化の家の専属カンパニーになる ケース・マイケル，ローザス結成 ルドルフ・ヌレエフ，パリ・オペラ座バレエ芸術監督に就任
1980年代	84	CCN（国立振付センター）を11都市に設置 カンヌとグルノーブルに国立振付センター設立（ルイリエ/ガロッタ） カロリヌ・マルカデ，ル・アーブル市文化の家の舞踊監督に就任 リヨン国際ダンス・ビエンナーレ開催 ウィリアム・フォーサイス，フランクフルト・バレエ芸術監督就任 カンパニー・プレルジョカージュ結成（95年バレエ・プレルロカージュと改名） テアトル・コンタンポラン・ド・ラ・ダンス創設
	85	オルレアン国立振付センター設立（フランソワ・ヴェレ）
	86	フランソワ・レオタル，文化大臣に就任 ナンテールにジョジアンヌ・リヴォワール，ヌヴェールにアンヌ＝マリ・レイノー，ブザンソンに矢野英征， カンパニーが各都市の文化の家の専属になる ル・アーヴルとロシェルに国立振付センター設立（ブヴィエ，オバディア/ショピノ） ガロッタ，グルノーブル文化の家の館長に就任
	87	ベジャール，ローザンヌに本拠地を移し，ベジャール・バレエ・ローザンヌ創設
	88	「ダンスの年」の企画開始 マッツ・エック，クルベリー・バレエ芸術監督就任
	89	フィリップ・デクフレ，アルペールヴィル・オリムピック開・閉会式振付 ダンス教師のための国家資格を制定（ダンス・クラシック/コンタンポランヌ/ジャズ） ヌヴェールに国立振付センター設立（レイノー） バスティーユ・オペラ開場
1990年代	90	バトリック・デュボン，パリ・オペラ座バレエ芸術監督就任 ルイリエ，パリ国立高等音楽舞踊学院振付研究科ディレクター就任 オハッド・ナハリン，バットシェバ舞踊団芸術監督就任
	92	O. デュボックが『Retours de scène』を，D. ラリユーが『Attentat poétique』をパリ・オペラ座に振付 モーリス・ベジャール，「ルードラ」創設
	93	バレエ・アトランティック・レジーヌ・ショピノ創設 ジャン＝クリストフ・マイヨー，モンテカルロ・バレエ芸術監督就任
	95	ブリジット・ルフェーブル，パリ・オペラ座舞踊監督に就任 カロリン・カールソン，クルベリー・バレエ芸術監督就任 ジョゼフ・ナジ，オルレアン振付センター芸術監督就任 ガロッタが『les Variations d'Ulysse』をパリ・オペラ座に振付
	96	マシュー・ボーン，『白鳥の湖』振付 マッツ・エック，『眠れる森の美女』振付
	98	マリ＝クロード・ピエトロガラ，マルセイユ・バレエ団芸術監督就任

